

3 日本民俗学と中国

■ 福田アジオの民俗学と植民地論

直江広治を含めて、何人もの柳田国男の門弟が「満州」さらには中国に赴き、そこに研究の場を発見しようとしたところに、柳田国男自身の判断を含めた、日本民俗学の植民地主義との関係が表出しているように思われる。それは大英帝国とインドやアフリカとの関係に擬えることができる、異なる世界の研究である。日本の一国民俗学とは抵触しない距離をおいた地域での民俗学として行われたことだけは明らかである（三三頁）。

これは福田アジオの「近代日本の植民地と民俗学」⁽⁵⁾の結論の部である。福田の着目は表題にもあるように、植民地と民俗学の関係にあり、そこで民俗学を初期柳田国男の民俗学と確立期の一国民俗学という二つの段階に分けているが、とくに後者は本論の扱う時期と重なる。

福田の理解では、この第二時期において、「一国民俗学」によって排除された植民地が問題となり、柳田はアイヌ、台湾、朝鮮、満洲などの地に論理的に日本民俗学と別の民俗学が成立し、日本民俗学と「比較民俗学」の関係を構成すると認めるながら、朝鮮に関して態度が慎重であった。彼の直弟子がもっぱら満洲、中国で活躍していることに注目すれば、「一国民俗学と抵触しない距離」で民俗学研究を行うのは、「柳田国男自身の判断を含めた、日本民俗学の植民地主義」の表出であるという。

「比較民俗学」と植民地との関係に注目したのは卓見といえよう。しかし、福田の論はいくつかの難点がある。

第一、本論の第1章で整理したように、「一国民俗学」の理論形成は一九二〇年代末から始まり、少なくとも一

九三二年時点ですでに完成をみた。しかしその過程で排除されたものはすぐには問題とならなかった。柳田が明確に「比較民俗学」について言及したのは一九四〇年のことで、この時間の差はどう理解すべきなのか。

第二、太田陸郎のように、中国に「研究の場を発見しようとした」のではなく、召集され、軍人として赴いた柳田の門弟のことをどう理解するのか。大学や研究機関に就職した門弟とどういう関係があるのか。

第三、果たして、大間知篤三や守随一の満洲行、直江広治の北京行は「柳田国男自身の判断を含めた」のかどうか。これはまた柳田の意思とその弟子たちの行動との関係をどう理解すべきかという問題にもなるだろう。

第四、古稀記念会の国外大会の計画過程を見れば、最初の提案から、二つの座談会の発言まで、朝鮮と台湾が一貫して重要な対象であり、すでに日本の文化について理解のある現地研究者が現れた意味で、柳田はこの二つの地を、これから展開する「比較民俗学」の実験台として見ていたことが事実である。すると「一国民俗学とは抵触しない距離をおいた地域」という理解は果たして妥当なのか。

第五、一九四〇年朝鮮に関する発言に慎重な態度が見えたが、第5章で見てきたように一九四三年の古稀記念会関係の発言にはむしろ頗る積極的で、しかも実践の意欲が強かった。この態度の変化は重要である。

■日本民俗学にとっての中国

以下、福田の論を意識しながら一九三〇、四〇年代の日本民俗学と中国の関係を整理してみる。

一九三〇年代、柳田国男は「一国民俗学」の理論を確立させた。第1章で論じたように、その場合の「一国」はあくまで「一種族一言語一国」の「日本」をさしている。しかし理論形成の一九三〇年頃、日本は樺太、台湾、朝鮮という植民地を持つ「帝国」であったことを考えると、「一国民俗学」としての日本民俗学は実は「内地民俗学」でしかなかった。民俗学は内地以外の地域との関係にはふれないまま、組織的な調査と資料蒐集、整理に取り組んでいた。満洲事変、「満洲国」建国によって、「帝国」以外に日本と親密な関係にある地域が現れたが、柳田の姿

勢がそれによって変わることはなかった。やがて彼から直接教わった直弟子が「木曜会」として民俗学活動における組織の中核となり、全国的な民間伝承の会も発足し、柳田の理論的指導に従って民俗学の実践活動を展開していた。そこでは帝国内の外地さえ排除されており、中国もまた入る余地はなかった。

日中戦争によって、特に長期戦に突入した一九三九年以降、中国との関わりが大幅に増えるという事実が生じた。内地にいた日本民俗学者が満洲と関係を持ったのはこの時期において初めて現れた現象であり、それは日中戦争によって満洲以外の中国と深く関わるようになったことと時期を同じくすることは見逃せない。

その関わりは強制された受身的なもの、たとえば太田陸郎の召集、そして日本から逃げ出したいという半分消極的なもの、たとえば守随一と大間知篤三の赴任、さらにまったく自主的な積極的なもの、たとえば直江広治の北京行などいくつかのパターンがあるが、共通するのは、その赴く先は中国であるということである。一九三八年末以降というタイミングを考えれば、そこに主体的な選択より、時代の影響を大きく認めなければならない。中国との関わりを要求する時代であり、またそのための機会、条件が整っていた。日本の民俗学者が戦時下一番関わった地域は中国であり、これは個人の選択、学問の理論を越えて、まず時代が作り出した結果であったと認めよう。

次に、たとえ柳田は彼らの中国行には積極的な態度を持っていたとしても、確固したビジョンのもとで弟子たちを派遣したという理解はできない。むしろ直弟子を含める民俗学者が数多く中国に赴いた現実、柳田にして日本民俗学と内地以外の地域との関係を考え直させる契機となったと見るべきである。一九三九年以降の言及はまさにその表れの一つとして理解されよう。しかし当時はまだ実践的に関わろうとする積極的な姿勢はなかった。

戦争の長期化に従って民間伝承の会会員と中国との関連は拡大していく。中国と関わった民俗学者には、高い文化史の素養のある太田陸郎、理論と組織の両面で木曜会の中心的存在である大間知篤三、民俗学と中国に強い興味があり、青年としての情熱と活動力の持ち主である直江広治のような人物がいた。彼らは何れも長期的に中国に滞在し、学問的営為を続け、中国に関する論考を数多く発表していた。軍人である太田は行動に色々な制限があ

表27 戦前『民間伝承』掲載会員外地通信一覧

号数(年月)	守随	大間知	太田	岸田	其他	号 数	大間知	太田	直江	沢田	其他
4-6 (39.3)	●					6-6 (41.3)	●	●			大山彦一
4-7 (39.4)	●	●				6-7 (41.4)		●			
4-8 (39.5)	●	●				6-10 (41.7)					周作人、方紀生
4-9 (39.6)	●										
4-10 (39.7)			●			6-11 (41.8)	●		●		〈中島恒雄〉
4-11 (39.8)	●					6-12 (41.9)	●	●			〈中島恒雄〉
4-12 (39.9)		●	●			7-1 (41.10)		●		●	斉藤甚兵衛
5-1 (39.10)			●	●		7-2 (41.11)		●			
5-2 (39.11)		●				7-3 (41.12)		●	●	●	
5-3 (39.12)	●	●	●	●	井上昇三	7-5 (42.2)					千葉徳爾
5-4 (40.1)		●				8-5 (42.9)		〈●〉	●		〈清水常吉〉
5-5 (40.2)			●	●		8-7 (42.11)				●	〈押尾孝〉
5-6 (40.3)			●			9-1 (43.5)					長岡博男
5-8 (40.5)			●			9-4 (43.8)				●	小島勝治、 〈日野巖〉
5-10 (40.7)			●								
5-11 (40.8)		●	●			9-5 (43.10)			●	●	
6-2 (40.11)			●			10-1 (44.1)			●	●	多田貞一
6-3 (40.12)			●	●	早川孝太郎	10-5 (44.5)			●	●	関口泰
6-4 (41.1)		●									

註：複数通信者の中国滞在期間は太田陸郎（38.7～42.7）、守随一（38.10～）、大間知篤三（39.2～）、岸田 定雄（39.8～）、直江広治（41.7～）、沢田四郎作（41.7～）。〈 〉は中国以外：太田（「馬來」）、中島（「釜山」）、清水（「羅南」）、押尾（「仏印」）、日野（「マライ」）。

出典：『民間伝承』各号より作成。

り、組織的な研究活動は許されなかったが、大間知篤三は「新京民俗学同好会」「満洲民族学会」、そして直江広治は「民風会」「東方民俗研究会」などの学会活動に積極的に関わった。

彼らはまた頻繁に日本民俗学の中心部との連絡を図っていた。守随一の通信四一六（一九三九年三月）を皮切りに、大間知、太田、直江、沢田四郎作などにより『民間伝承』誌上、中国からの通信はほぼ毎号のように載せられている（表27参照）。七一五まで毎号あった会員通信欄は七一六以降、不定期になったので、中国からの通信が載せられていない号は『民間伝承』の休刊までわずか八号（五一七、九、一二、六一一、五、八、九、七一四）しかなかった。朝鮮から

は三本、マライからは二本、仏印からは一本があるが、中国からの圧倒的な存在感を示している。彼らは多数の通信を『民間伝承』、そして柳田国男や橋浦泰雄に寄せ、自分の現状、学問的活動や中国の民俗事象についての所感を報告している。これは日本民俗学と現地にいる民俗学者を繋ぐ役割を果たしており、他方、また日本民俗学と内地以外の地域との関係に対する再考を促していたといえよう。

注意すべきなのは、内地以外の地域からの入会者は一・二（一九三五年十月）にある台湾の中島哲夫を最初とし、その後、樺太から大矢真一（一九三五年十二月）、大連から岡川栄蔵（一九三六年二月）、朝鮮から加藤孝市（一九三六年三月）と少なくとも一九三六年の早い時期にすでに内地以外の各地から会員があつた（表28参照）。しかし会員通信には大矢真一以外、これらの地域からの通信がなかった。『民間伝承』誌上中国からの通信が多く載せられるようになり、そしてこれら内地以外の地域での会員数が増えつつあったときでも、情況はほとんど変わらなかった。多くの中国通信は、より正確に言えば、内地から中国に赴いた会員たちからの通信であつた。内地以外の地域との関係において日本民俗学の理論及び組織のあり方が問われるようになったのも、とりもおさず、多くの内地民俗学者が中国と関わったという新たな現実によるものであつた。

組織の中核としての木曜会は、東京に在住する連絡上の便利もあり、戦時下においても活動力を保った。その中心メンバーは、大藤時彦、倉田一郎、関敬吾、橋浦泰雄などであつた。新京が開催地としてまずこの木曜会の中心メンバーたちによって提案された事實は、民俗学の大きな活動は何でも柳田の理論的思考の結果という従来の柳田国男論における暗黙の前提に修正を求めている。

同じ活発な動きを見せている北京が民俗学大会の開催予定地として最初の木曜会案には入っていなかった。その理由として二つ考えられる。一つは同じ木曜会のメンバーとして、木曜会結成当時から理論面と組織面で中心的人物であつた大間知篤三と、一九三九年に初めて入会し、日本では目立った活動をしていなかった直江広治とは、メンバーの中ではつきりと地位の差があつたことである。もう一つは、提案された当時、大間知の活動によって、

表28 戦前民間伝承の会内地以外入会会員一覧

[illegible]

四三、五	九一	糸井貫一	永海一義、高田哲太郎	満洲帝国協和会、高嶽権一、村岡重夫、金沢寛太郎、山根順太郎、大山彦一、千葉幸雄、神尾式春、上田利美、須知善一、菊川泰平、中島睦彦	関天植、河内山豊、増田常久、蛭子ます、保田卯三男、黒岩和夫		
四三、六 四三、八	九一二 九一四	劉梓榮	白石元則、武田護、井上定雄、手塚孝、原敏夫、三浦郷雄	武田銳二 村岡重夫、金沢寛太郎、山根順太郎、大山彦一、千葉幸雄 石原勇、小林正吉、仲田豊順、古橋博、福島正夫、和田重種	林静七、植村正雄、田口澄太郎、平田俊雄、喜連泰二、大邱神社々務所、赤司健之、原田進、平山喬、仁川専亮、局出張所、磯岡欣弥、三木弘、木下斉治、渡辺茂、勝本光六	会田源作、手島太郎、木下哲太郎、牧染林、武田熙	岡部理
四四、四	一〇一四	江川武吉		小倉長太郎、畑中梅吉、湯浅一男、山名晃、椎名忠吉、林睦夫、山中鯉一、大郷四作、飯田巖、高橋権一、山口信男	大原祐平、高見直芳、高橋浅治、多田芳江、新井薫、瀬尾一志、水原理学会	和田憲夫、華北総合調査研究所、橋川時雄、吉岡義豊、鳥居龍蔵	
四四、五	一〇一五			高須清二、国立中央図書館、岡田藤太郎、加地(持)市郎、朝野武彦、長岡勉、中道太志、岩佐芳明、富田文、関野護、岩切寛、沢田広実、大瀧栄蔵、滝沢俊亮、柏倉要吉、満洲帝国協和会中央本部調査	加藤孝市、薄木清人、保田素一郎、清水完治、野口幾一、首東邦栄、松林義三、千田直重、甲斐馬左也、関天植、河内山豊、増田常久、蛭子ます、保田卯三男、黒岩和夫、林静七、植	生田中庸、松田元次、会田源作、手島太郎、木下哲太郎、牧染林、武田熙、和田憲夫、華北総合調査研究所、橋川時雄、鳥居龍蔵	
四四、十二	「民間伝承の会會員名簿」	金関丈夫、池田敏雄、齊藤義七郎、丸善詰郎、劉梓榮、江川武吉、西村兵部、今井義忠	横山俊珠、永海一義、高田哲太郎、白石元則、井上定雄、手塚孝、原敏夫、三浦郷雄	高須清二、国立中央図書館、岡田藤太郎、加地(持)市郎、朝野武彦、長岡勉、中道太志、岩佐芳明、富田文、関野護、岩切寛、沢田広実、大瀧栄蔵、滝沢俊亮、柏倉要吉、満洲帝国協和会中央本部調査	加藤孝市、薄木清人、保田素一郎、清水完治、野口幾一、首東邦栄、松林義三、千田直重、甲斐馬左也、関天植、河内山豊、増田常久、蛭子ます、保田卯三男、黒岩和夫、林静七、植	生田中庸、松田元次、会田源作、手島太郎、木下哲太郎、牧染林、武田熙、和田憲夫、華北総合調査研究所、橋川時雄、鳥居龍蔵	成城大 学民俗 学研究 所蔵 「橋浦 泰雄関 係文書」 所

部図書資料室、高嶽権一、 村岡重夫、金沢寛太郎、 山根順太郎、大山彦一、 千葉幸雄、神尾式春、上 田利美、須知善一、菊川 泰平、中島睦彦、武田鋭 二、石原勇、小林正吉、 仲田豊順、古橋博、福島 正夫、小倉長太郎、畑中 梅吉、湯浅一男、山名晃 椎名忠吉、林睦夫、山中 鯉一、大郷四作、飯田巖、 山口信男、青木一雄、青 木実、姉川磐根、上野充 一、内堀斉、大間知篤三、 橘文策、千葉徳爾、矢島 直一	村正雄、田口澄太郎、 平田俊雄、喜連泰二、 大郎神社々務所、原田 進、平山喬、仁川専亮 局出張所、磯岡欣弥、 三木弘、木下斉治、渡 辺茂、勝本光六、大原 裕（祐）平、高見直芳、 高橋浅治、多田芳江、 瀬尾一志、水原理学会、 津田逸夫、新井馨、佐々 木五郎	石田英一郎、岡 部理、風巻景次 郎、瀬川良三、 多田貞一、直江 広治、永尾龍造、 西田重一、春原 孝平		収

出典：『民間伝承』各号、「民間伝承の会会員名簿」（一九四四年十二月）より作成。

満洲では地方支部を設立し得る会員数を持つことになったのに対して、北京では新入会員はまだわずか三名しかいなかったという事実である。

しかし、それを受けて、柳田国男が朝鮮、北京、台湾を言い出したのは、明らかに木曜会と違う考え方を持っていた。朝鮮は延べ十八人、台湾は延べ十二人、ともに支部設置の人数に満たしていない。しかも台湾にも朝鮮にも、柳田直系の研究者がいない。柳田国男の国外大会開催地の設定は、組織面の現状から生まれるものではなく、もつと理論的な問題、つまり「比較民俗学」の実践を意図しての戦略的なものであった。

一九四二年に入り、日本民俗学の再編成の気運が高まった。一九四三年初めて会員が「全国の各府県及満支の国外に亘つて」いることにふれ、内地以外、新京の大間知、守随、北京の直江が世話人として載せられた。この時点

表29 学問対外関係構想比較

	柳田国男1934年 「世界民俗学」	柳田国男1943年 「比較民俗学」	岡正雄1945年 「東亜民族学」
課題の性質	目標課題	実践課題	実践課題
設定の駆動力	学問の内的発展	社会の外的需要	学問の内的発展と 社会の外的需要
方法への要求	先延ばし可能	提示が必要	提示が必要
地域の限定性	無差別	実際に限定	限定
対他国同類学問の 関係	自発的な発展に依存	共通課題による 方向性の提示	超越的に存在
期待する担い手	ネイティブ	日本人も可	日本人による研究
課題の目的	人類の普遍性	限定地域間の共通性	対象民族の実態把握
設定の媒介	人類	中国	欧米

で中国以外の地域は入ってなかった。

しかし柳田のより戦略的な構想が打ち出され、当時東アジアにある内地以外の全地域で国外大会を開くという新しい試みが始まった。中国という新しい問題への対応が迫られた結果、従来未解決のままの植民地との関係という問題が浮かび上がったという結果になる。それは内地において「一国民俗学」の枠組みを保ちながら、内地以外の地域での民俗学研究を「比較民俗学」で結ぶ構想であった。同じく日本の勢力下にながら、当該地域に民俗学研究が認めない地域、たとえば樺太、南洋などはこの時点でも排除されている。この意味で柳田の「大東亜（圏）民俗学」（＝比較民俗学）は「大東亜共栄圏」と違うイメージを持っている。

この「比較民俗学」は決して一九二〇年代、「一国民俗学」の彼岸として提示された「世界民俗学」ではなかった。「世界民俗学」は自発的に発展を成し遂げた各国民俗学が持ち寄って、人類社会の普遍的な法則の発見へと進む学問として描かれている。しかし、『民俗台湾』座談会や「国際共同研究課題」などに見るように、当時の「比較民俗学」は当面の需要によって促され、隣接して密接な利益関係がある地域との間、共通項を濃くしていくための学問として構想されていた。

国外大会の候補地としてあげられた「台湾」、「満洲」、「北支」、「蒙古」は日本の支配上の区分であり、一部の地域では、実質日本が完全

に支配できる範囲はかなり限られている。そして担い手としての当地の民俗学組織を見れば『民俗台湾』グループ以外、構成員全員が日本人であった。以上のことを背景とした「国際的」展開はあくまで日本の軍事力に依拠した地域に限って、日本人中心の団体による「擬似国際的」展開でしかない得ない。

「世界民俗学」から「比較民俗学」への道のりは決して学問内の理論発展の問題だけではなかった。大きく言えば戦争による中国との遭遇という背景、具体的に言えば民俗学者の個々の関わりや活動から、その必要性と可能性が生まれた。古稀記念会事業はその実現の恰好の場となったのである。「民俗語彙」、共通課題、或いは実際の研究者養成の方法など、すべてはこの文脈において考えられ、また実行に移ろうとしていた。この理論的構想のもので、初めての会則がつくられ、そこに「国外民俗学との提携連絡」を会の目的として明記され、さらに内地以外の各地域の有力研究者を評議員として置くようになった。

戦時下の日本民俗学の再編成は、中国によって大きく浮かび上がる日本民俗学と内地以外との関係という問題を「比較民俗学」の実現によって解決しようとしているといえよう。

当時、これらの地域はすでに植民地として帝国日本の一部になっているのか、或いは日本の軍事支配の下に置かれている状況を考えれば、内地以外でありながら、まさに拡張しつつある「帝国日本」内部の問題でもあった。台湾、朝鮮などを含め幾つかの異なる民族の文化を内地との共通点を濃くしていくことによって「帝国」のもつ矛盾なく統合できる道を、岡正雄の「東亜民族学」⁶と違うアプローチで独自に模索しようとしていた（表29参照）。

「二国民俗学」にとって、中国は最初から必要な対象ではなかった。戦争によって触発され、戦争の拡大や長期化によって存在が大きくなった中国は、日本民俗学にして「比較民俗学」の実践を始めさせたが、その構想や実践は間もなく戦争の終結に伴って終止となった。戦後、柳田国男古稀記念会そのものは続けられていたが、その中でいち早く国外大会という項目は消え、ある意味で学会として当然である「国外民俗学会との提携連絡」も消えてしまった。やがて日本の外にいた民俗学者が日本に戻り、日本民俗学は初めて純粋な「一国民俗学」となったのである。

る。それも学問内部だけの問題ではない。戦後は、すべての内地以外の土地を失い、内地だけの領域に戻ったことにより、「一国民俗学」の守備範囲が初めて国家領域としての「日本」と一致したという外在的な条件があった。またこれは、一九三〇年代の「一国民俗学」と戦後の民俗学を直結させ、戦時下中国との関わりによって触発された、植民地台湾、朝鮮なども組み込むような組織的、方法的な試みを、一時的な逸脱として忘れてしまう条件でもあった。

柳田以降、「個別研究法」「都市民俗学」から「いくつもの日本」などの提唱には「日本」という枠を取り払う志向が窺えるが、研究対象はもっぱら日本国内に限定されており、民俗学は依然「一国」のイメージが濃厚である。一方、日本以外の地域について「比較民俗学」の名で調査や研究が展開されているが、日本文化の特質、或いは日本人のルーツの解明を目的とするその姿勢は外に向けられるより日本に指向しており、その意味で限りなく「一国」的であると言える。日本民俗学は学問として日本以外の地域と関わる必要があるかどうか、必要であればどのように関わるべきか。グローバル社会と言われる今日においてもこの問いは依然として未解決のままであるといえる。